今回の実践の課題として残ったのは，児童間での意見の交換があまり行われなかった点である。児童が読み取ったものを，教師が黒板に書き，ある程度意見が出終わったところで，教師がそれらをまとめる，という形になってしまった。児童間で，もっと様々な意見を出し合い，討論する形になれば，さらに読み取る力が高まったと考える。今回は，教師が読みを深める役割を担ってしまった。そのためノートには，自分の書いたのもとは別に，黒板に書いたものを写す部分が多くあった。

今後は，更なる発展として，全体の流れを読み取った後，ひとつの場所に注目して，主人公の気持ちやその変化を，じっくり考える時間を取りたいと思う。

（名古屋市立平子小学校教諭）

実践記録を読んで

廣　田　隆　志

この実践記録を書いた吉川秀幸さんは、本学の初等教育課程国語専修で平成16年３月の卒業生である。初任校は名古屋市立平子小学校で、４年目を迎えている。研究テーマは、「登場人物の気持ちを読み取る力を高めるための指導」（５年）であり、子供たちに読みの力をつけるために緻密で実態に即した指導を行っている。以下、それについて述べる。

１、研究のねらいが明確であること

吉川さんは文学作品の読みについて、「文中の言葉や表現を手がかりに登場人物の気持ちや場面の様子を読み取ること」であり、その「言葉や表現はただ一か所ではなく複数あり、それらを見つけ、つなげることで、気持ちの変化の読み」が確実になっていくと考えている。そして、この研究のねらい(目標)を、

① 児童が自らの力で、主人公の気持ちの分かる言葉や表現を探し出し、

② それらをつなげることで気持ちの変化を読み取れるようにする

としている。まず、「主人公の気持ちの分かる言葉や表現を探すこと」、次に「言葉や表現をつなぐことによって気持ちの変化を読み取ること」とこの二つがねらいであることを明確にしている。また、「児童が自らの力で」という文言から一人一人の読み

の確立を目指していることも伺い知れる。

2、自主教材を加えた単元構成にしていること

教科書教材「五月になれば」は、「物語全体を通して、少しずつ心の変化が表れている」という理由で一次実践に位置づけ、ついで自主教材「おじいさんのランプ」(新美南吉・作)は、「心の動きの変化が大きく、変化する箇所もたくさんあること」と「気持ちを捉える言葉や表現を見つけやすく、つなげやすい」という理由で二次実践に位置づけている。 これは子供の実態を踏まえ、ステップを考えた単元構成である。

3、段階を踏んだ指導方法になっていること

第一次実践は3段階になっている。①では、教師が先に主人公の気持ちを提示し、子供たちにそれが分かる言葉や表現を文中から探させている。②では、子供たちに主人公の気持ちを考えさせ、それに関係する言葉や表現を見つけさせている。③では、主人公の気持ちが表れていると考えられる言葉や表現を複数見つけさせ、そこから主人公の気持ちの変化を考えさせている。簡略して言うと①では主人公の気持ちを教師が提示し、②では主人公の気持ちを子供たちに考えさせ、③では主人公の気持ちの変化を考えさせるようになっている。

第二次実践では、主人公の気持ちの変化が分かる言葉や表現をいくつかノートに書き出させ、それらをつないで気持ちの変化を捉えさせようとしている。これらの指導方法から、子供たちの実態に即して、ローステップから順次ハイステップへの段階を踏んでいることが分かる。

4、「読むこと」の学習の基本的な過程であること

1時間の授業の流れを、「目当ての確認」→「音読」→「自分の力で読み取り」→「話し合い」→「自分の力で読み取り」→「まとめ」としている。「自分の力で読み取り」が「話し合い」を挟んで2度行われているが、「話し合い」で交流したことを基にして更に、自分の力で読み取りを深めることになる。また、それは子供一人一人に自分の読みの確立を目指させていることになる。子供一人一人に、「自ら学び、自ら考える」態度や力を育成していくことを「読むこと」の学習過程の面から考えた時、私は「ひとり勉強」→「友だち・先生勉強」→「まとめのひとり勉強」という学習の流れがいつも必要であると思っている。この「ひとり勉強」に当たるのが「自分の力で

読み取り」であり、「話し合い」に当たるのが「友だち・先生勉強」である。この学習は、自分の読み取ったことを友だちや先生に語りかけ、問いかけ、友だちや先生の話を聞き取り、自分の読みをもっともっと向上させようとする営みである。更に、「まとめのひとり勉強」に当たるのが「まとめ」となっている。第一次実践と第二次実践ともに、この1時間の流れを一定にしているが、子供たちにとって授業の流れを知っていることになり、見通しを持って授業に臨むことができる。

5、子供の思考を深める発問があること

第一次実践で、言葉は見つけられても理由を考えつかない子供たちに、「じゃあ、転校したら、今までみたいに好きなときに来れると思う？」という発問。主人公の気持ちの変化を考えさせるために「前はどんな気持ち？」「じゃあ今は？」と前後の気持ちを考えさせて、その変化を導き出している。

第二次実践では、「ランプ＝巳之助」という考えを提示するために、「巳之助にとってランプって何だろう。」「ということはランプと巳之助の関係は？」という段階を踏んだ発問をしている。

吉川さんは、「児童が自らの力で、主人公の気持ちの分かる言葉や表現を探し出し、それらをつなげることで気持ちの変化を読み取れるようにする」ことを目標にしているが、これは物語文の読み方の指導であり、「学び方」の指導でもある。「自分の力で」という文言から、子供たちにこの「学び方」を身につけさせたいという願いも伺われる。一つのことが「身につく」ためには、

① 身につけさせたいことを、繰り返し繰り返し、かなり長期間にわたって
② 子供が、自分で実際にやってみる体験を継続し
③ 取り組みの過程での、教師、なかま、親たちからの認め、励ましがあって
④ 自分がやったことへの成功感、成就感、満足感、充実感が味わえる

ことが必要である。今後、イメージ化(想像する力)、豊かな、巧みな表現の仕方にも目を向けさせる指導においても「読み方」「学び方」を是非とも身につけてやってほしいと思う。